

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370226

研究課題名(和文)メディア環境との相関性に基づく日本探偵小説の史的研究

研究課題名(英文)Historical study of the Japanese detective story based on the correlation with the media environment

研究代表者

押野 武志 (OSHINO, Takeshi)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：70270030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本共同研究は、近代日本の探偵小説の特質を、1920年代の世界同時的なモダニズム運動の中で捉え直し、そこから今日に至る探偵小説の展開を、西欧の探偵小説や日本の文学との関係だけでなく、マスメディアや映画をはじめとする視覚メディアとの錯綜した交渉関係性に着目しながら明らかにする長期的な史的研究である。

それぞれの時代の科学的言説やテクノロジー、サブカルチャーとの交渉、探偵小説のメディアミックス展開にも目を向け、探偵小説の社会的な位置づけの変遷を分析概念の新たな理論構築によって明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This collaborative research is aimed at reexamining the characteristics of the modern Japanese detective story in the worldwide simultaneous modernism movements of the 1920s and is the long-term historical study which makes clear the development of a detective story from there to today paying attention to complicated relationship of negotiations with visual media such as the mass media and a movie as well as a relation between European detective story and Japanese literature.

We paid more attention to the scientific discourse and technology of each time, the negotiations with the subculture, the media mix development of the detective story and clarified the change of the social positioning of the detective story by the new theory construction of the analysis concept.

研究分野：日本近代文学

キーワード：探偵小説 研究者交流 共同シンポジウム サブカルチャー 大衆文化 メディアミックス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 応募者は、研究代表者として平成20年から22年度にわたって文科省科学研究費補助金(基盤研究C)を得て、研究課題「1960年代日本における文学概念の変容についての総合的研究」に従事した。本共同研究の目的は、日本の1960年代において、社会的・思想的・政治的な諸言説が重層的・多元的に干渉し合いながら、文学概念の編成と再編がどのように行われたのかを究明することであった。純文学/探偵小説、カルチャー/サブカルチャー、文学/政治、事実/虚構といった60年代の文学をめぐる新たな線引きと錯綜した諸言説をさまざまな領域から横断的に分析することで、1960年代の文学をめぐる歴史的な特質を総合的に明らかにした。探偵小説やサブカルチャーとのジャンル横断的な文学研究は、研究代表者として平成23年から25年度にわたって文科省科学研究費補助金(基盤研究C)を得た研究課題「1968年以降の現代文学とサブカルチャーの相互交渉と再編に関する総合的研究」に引き継がれた。今日の文学研究・文化研究の問題点を近代批判の文脈から68年の思想まで遡り整理した上で、68年代以降今日に至る現代日本文学とサブカルチャー、あるいは活字メディアと視覚メディアの錯綜した交渉関係を中心に同時代の文化・メディア環境も視野に納めながら通史的に明らかにしたものである。

(2) 本共同研究は、上述の研究課題を引き継ぎつつ、研究対象を探偵小説というジャンルに特化した。このジャンルは、学術研究対象の端緒となったばかりで、包括的なジャンル論及び史的研究はまだなされていない新領域であり、1920年代から現代までの探偵小説の成立と再編過程が通時的・総合的に究明することが期待される。ある時期の探偵小説の特質を部分的に捉える論点や分析概念はこれまでも提出されたが、日本探偵小説史を1920年代から今日まで、戦前と戦後を分割せず、総合的に捉える分析概念とパースペクティブはまだ構築されていない。

## 2. 研究の目的

(1) 近代日本の探偵小説の特質を、1920年代の世界同時的なモダニズム運動の中で捉え直し、そこから今日に至る探偵小説の展開を、西欧の探偵小説や日本の文学との関係だけでなく、マスメディアや映画をはじめとする視覚メディアとの錯綜した交渉関係性に着目しながら、具体的な相において明らかにする長期的な史的研究である。

(2) 多様なメディアとのジャンル横断的な探偵小説史を構築するためには、従来の方法論や文学理論では捉えきれないという観点から、新たな分析概念及び探偵小説理論の再

構築も同時に目指す。それぞれの時代の科学的言説やテクノロジー、サブカルチャーとの交渉、探偵小説のメディアミックス展開にも目を向け、メディアとしての探偵小説の社会的な位置づけの変遷を分析概念の新たな理論構築によって明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 共同研究者は、探偵小説の近代性とジャンルの特殊性をめぐる通史的な展開と同時代言説との個別具体的な事象の分析を通じた理論構築という二つの座標軸に基づいた方法論を共有する。押野武志(研究代表者)は、戦前期の探偵小説を中心に叙述トリックの史的展開を究明しながら、研究全体を統括する。谷口基(研究分担者)は、戦中・戦後の変格探偵小説を中心に、その史的展開と、「変格」概念の再定義を行う。横濱雄二(研究分担者)は、1970~80年代の探偵小説を中心に、メディアミックス研究を行う。諸岡卓真(研究分担者)は、1990年代以降の探偵小説を中心に、ジャンルの純化と拡散化の諸相を明らかにする。吉田司雄(連携研究者)は、探偵表象についての史的研究を通して研究全般の企画補助を行う。

(2) 研究代表者及び研究分担者のそれぞれの具体的な研究の方法は以下の通りである。

押野武志は、江戸川乱歩の探偵小説と犯罪報道との関係性を中心に、戦前期の本格探偵小説の再評価を目指す。乱歩作品の二〇世紀的探偵小説の先駆性と同時に、乱歩の描く探偵像の変容という側面と心理の発見という問題に着目しながら、乱歩がなぜ本格ミステリから撤退し、変格ミステリに向かったのかも明らかにする。さらに、乱歩のトリック偏重主義が戦後の本格ミステリにどのような影響を与えたのかを、叙述トリックの再定義を行いながら明らかにする。60年代の松本清張らの社会派ミステリの登場に伴う平野謙の提起から高見順・中村光夫・山本健吉・江藤淳・福田恆存らが参加して行われた「純文学変質論争」や中井英夫のアンチミステリにも着目し、純文学/探偵小説といった枠組みを超えた文学概念の変容について明らかにする。

谷口基は、著書『変格探偵小説入門』(2013年、岩波書店)にて提示した変格探偵小説の定義を補完するため、同書の各論から漏れた城昌幸、瀬下耽、氷川隴などの、幻想質の作品を得意とした作家たちの作品群を分析する。探偵小説と既成文学作品とをつなぐ文学性には、怪奇・幻想の要素が特に顕著であるが、従来の怪談とは異なる非論理の論理で貫かれた変格探偵小説の創出に成功した江戸川乱歩、夢野久作らと比較して、これら作品群がいかなるオリジナリティを主張し得るのかこの点を明瞭にする

ことが第一の目的である。同時に、横田順彌、長山靖生らの先行研究においては 古典的 SF と位置づけられた海野十三、蘭郁二郎らの作品における 変格探偵小説 としての意義を論証することを目指す。

横濱雄二は、横溝正史の探偵小説とその映画化作品などのメディアミックスを中心に、戦後期の本格探偵小説と 1970 年代から 80 年代にかけての探偵小説とを比較検討する。横溝正史作品はその作風から 60 年代のいわゆる社会派ミステリの隆盛の陰に忘却されていたが、60 年代末から再評価され 70 年代に脚光を浴びることとなった。そこで横溝正史作品の受容について、第二次世界大戦後の 1940 年代後半から 50 年代と 70 年代以降とを比較することによって、両者の間にある探偵小説をめぐるパラダイムの変化を見通すことを目指す。具体的には、同じ小説作品の映画化（テレビドラマを含む）について、その相違点を明らかにすることを第一とし、当時の探偵小説専門誌や映画雑誌を手がかりに、それらの受容のあり方を把握し、相互に比較検討する。

諸岡卓真は、1990 年代以降の「新本格」と呼ばれるグループに注目し、この時期の探偵小説が描く推理の特徴について検討する。法月綸太郎「初期クイン論」(『現代思想』1995 年 2 月号)に代表されるようにこの時期の探偵小説は「ロジック」へのこだわりが強いが、一方で幽霊や超能力、魔法といった超自然的な要素も探偵が語る推理の必須要素として提示されることが多かった。一見すると相反する二つの要素が、「新本格」の作家たちが描く推理のなかでどのような関係性にあるのかを、綾辻行人や米澤穂信らの諸作を通して具体的に分析して明らかにする。

吉田司雄は、研究課題「忍者と探偵、近代日本におけるキャラクター表象の形成と海外伝播に関する文化研究」の研究代表者として、平成 25・26・27 年度の挑戦的萌芽研究の交付を受けている。忍者表象や忍者映画との比較検討を通しての日本における探偵像の特殊性についての研究や日本の探偵小説のアジアにおける受容の実態についての研究と本共同研究を接続させることで、本共同研究とサブカルチャーとの相互関連性をさらに発展させる。またアジア圏の研究者との学術的ネットワークを構築する。

#### 4. 研究成果

(1) 平成 26 年度は、上述の研究目的、研究方法に沿って研究に従事した。探偵小説の近代性とジャンルの特殊性をめぐる通史的な展開と同時代言説との個別具体的な事象の分析を通じた理論構築という二つの座標軸に基づいた方法論を共有しながら、研究を分担した。その成果は、上述の吉田司雄が研

究代表を務める科研課題との共同のシンポジウム「忍者と探偵が出会うとき」(平成 26 年 8 月 9 日、北海道大学)の開催に結実した。忍者表象との比較検討を通しての日本における探偵像の特殊性についての研究や、日本の探偵小説のアジアにおける受容の実態についての研究と本共同研究を接続させることで、本共同研究とサブカルチャーとの相互関連性をさらに発展させることができた。

(2) 平成 27 年度は、前年度の研究成果を踏まえて研究を推進すべく、共同シンポジウム「忍者と探偵が出会うとき」(平成 27 年 8 月 1 日、甲南女子大学)を行った。前年度に開催した共同シンポジウムを承けて、企画されたものである。忍者から探偵へと変容するキャラクター表象の変容や現代の漫画や探偵小説に受け継がれている忍者や隠密的イメージの特質を明らかにした。

押野武志は、1920 年代の探偵小説の叙述トリックやメタフィクションの特質を同時代のモダニズム文学と交錯させながら、現代の探偵小説において多用される「セカイ系」や「ループもの」の具体的な分析を通して、「フラット」といった分析概念を、活字メディアと視覚メディアを横断的に分析できる概念として再定義する作業に入った。

谷口基は、戦前探偵小説における 変格的性質が戦後探偵小説にいかなるかたちで継承されていったかを確認する。変格の精神性が、探偵小説が推理小説へと再編成されていく流れのなかで削ぎ落とされ、他ジャンルへの編入を余儀なくされたという定説を保留し、その転換期の詳細を明らかにするとともに、戦前・戦後の探偵小説史の空隙を埋めることを目指した。

横濱雄二は、1970 年代から 80 年代の探偵小説とそのメディアミックスについて、横溝正史作品を中心にその諸相を検討する。とりわけ、従来の文学研究やミステリ批評では「謎解き」に焦点が当てられ、「探偵と犯人の知的闘争」(江戸川乱歩)の側面は重視されてこなかった。そこで探偵表象を具体的に検討することで、謎解きと同様に探偵小説で必須の要素である探偵と犯人のあり方を再考し、ミステリに対する新たな視座の構築を目指した。

諸岡卓真は、現代の小説やビデオゲームの中でも、真相への到達よりも登場人物たちによる「推理合戦」そのものを興味の力点とした作品群を具体的に分析し、現代探偵小説における「推理」の特徴を検討する。また、そのような作品にはしばしば「変格」的な要素が同時に見られることから、引き続き探偵小説における超常的な要素の検討作業も行った。

(3) 平成 28 年度は、多くの研究成果をまとめる総括的な研究の段階に至るべく、研究報告会(平成 28 年 12 月 17・18 日、甲

南女子大学)を開催した。本共同研究の目的を踏まえた本年度の研究計画の実施状況や各自の研究成果を報告し合い、共同研究全体について総括を行った。押野武志は、戦前期の探偵小説を中心に叙述トリックの史的展開を究明しながら、研究全体を統括した。谷口基は、戦中・戦後の変格探偵小説を中心に、その史的展開と、「変格」概念の再定義を行った。横濱雄二は、1970～80年代の探偵小説を中心に、メディアミックス研究を行った。諸岡卓真は、1990年代以降の探偵小説を中心に、ジャンルの純化と拡散化の諸相を明らかにした。

本共同研究の研究成果を平成29年度に公表すべく、出版企画についても討議した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計11件)

押野 武志、複数の「世界内戦」に向けて、層、査読有、9号、2016、75-92

押野 武志、ミステリと戦後詩、武蔵野文学館紀要、査読有、6号、2016、24-45

谷口 基、忍者から探偵へ/過渡期の口マンを検証する 山田風太郎『警視庁草紙』を手がかりに、層、査読有、9号、2016、95-115

谷口 基、すべてが空虚(うつろ)に 夢野久作の探偵と怪異、幽、査読無、26号、2016、70-73

諸岡 卓真、「日常の謎」と隠密 瀬川コウ『謎解き乙女と奪われた青春』論、層、査読有、9号、2016、132-148

谷口 基、乱歩趣味 という原風景、ユリイカ、査読無、47巻11号、2015、232-239

谷口 基、二十世紀沖縄怪談と本土(ヤマト)の表現者たち、社会文学、査読有、40号、2014、90-101

谷口 基、敗戦と怪談、文学、査読無、15巻4号、2014、126-142

横濱 雄二、片岡知恵蔵の金田一耕助 占領期日本における二つの映画作品をめぐって、文学、査読無、15巻6号、2014、67-80

##### [学会発表](計17件)

谷口 基、人文知の潜勢力 戦後社会運動を/から問い直す、日本近代文学会春季大会、2016年5月28日、亜細亜大学(東京都武蔵野市)

横濱 雄二、探偵・金田一耕助とその周辺、甲南女子大学日本語日文化学科(招待講演)、2016年10月22日、甲南女子大学(兵庫県神戸市)

押野 武志、戦後文学としてのミステリ、日本近代文学会東北支部冬季大会、2015年12月23日、仙台ビジネスホテル(宮城県仙台市)

谷口 基、忍者から探偵へ 過渡期の口マンを検証する、シンポジウム「忍者と探偵が会うとき」(科学研究費基礎研究(C)「メディア環境との相関性に基づく日本探偵小説の史的研究」)、2015年8月1日、甲南女子大学(兵庫県神戸市)

横濱 雄二、野村芳太郎監督『八つ墓村』とその周辺、日本近代文学会秋季大会、2015年10月25日、金沢大学(石川県金沢市)

諸岡 卓真、日常の謎をこじらせる 相沢沙呼『午前零時のサンドリヨン』、日本近代文学会北海道支部例会、2015年3月14日、北海道大学(北海道札幌市)

押野 武志、戦前期大衆文学論の諸相、シンポジウム「忍者と探偵が会うとき」(科学研究費基礎研究(C)「メディア環境との相関性に基づく日本探偵小説の史的研究」)、2014年8月9日、北海道大学(北海道札幌市)

横濱 雄二、1970年代の『獄門島』映画化作品について、第4回現代日本映画文学 相関研究会、2014年6月29日、信州大学(長野県松本市)

##### [図書](計7件)

横濱 雄二 他、マンガ・アニメで論文・レポートを書く 「好き」を学問にする方法、2017、288(149-168)

押野 武志 他、宮沢賢治 科学と祈りのこころ、北海道立文学館、2016、167(111-116)

谷口 基 他編、定本夢野久作全集第一巻、国書刊行会、2016、554(451-554)

谷口 基 他、怪異とは誰か、青弓社、2016、254(91-108)

横濱 雄二 他、映画と文学 交響する想像力、森話社、2016、331(157-183)

押野 武志、諸岡 卓真、横濱 雄二 他、日本サブカルチャーを読む 銀河鉄道の夜からAKB48まで、2015、北海道大学出版会、332(1-249)

谷口 基 他、忍者文芸研究読本、笠間書院、2014、254(100-111)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

押野 武志(OSHINO, Takeshi)  
北海道大学・文学研究科・教授  
研究者番号：70270030

##### (2)研究分担者

谷口 基(TANIGUCHI, Motoi)

茨城大学・人文学部・教授  
研究者番号：20634075

横濱 雄二 (YOKOHAMA, Yuji)  
甲南女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：40582705

諸岡 卓真 (MOROOKA, Takuma)  
北海道情報大学・経営情報学部・准教授  
研究者番号：40528246

(3)連携研究者

吉田 司雄 (YOSHIDA, Morio)  
工学院大学・基礎・教養教育部門・教授  
研究者番号：50296779